

氏名(国籍)	ばく 朴	かん 江	ふん 訓(韓国)
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博甲第4879号		
学位授与年月日	平成21年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	日本語における否定一致現象に関する研究 －韓国語との対照の観点から－		
主査	筑波大学教授	Ph.D. (言語学)	竹 沢 幸 一
副査	筑波大学教授	博士 (言語学)	加 賀 信 広
副査	筑波大学教授	博士 (言語学)	杉 本 武
副査	筑波大学教授	博士 (言語学)	沼 田 善 子
副査	筑波大学准教授	Ph.D. (言語学)	森 芳 樹

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

自然言語に広く見られる文法現象の一つとして、否定辞との共起を要求する否定呼応表現の存在がある。そうした要素は、Klima (1964) による any 類を中心とした英語の研究以来、一般に NPI (negative polarity item, 否定極性表現) と呼ばれ、その統語的認可条件を中心に数多くの研究が行われてきた。そうした研究のなかで、Haegeman and Zanuttini (1991, 1996) は、西フラマン語やロマンス諸語からのデータに基づいて、否定辞との共起は必要とするものの、any とは大きく異なった統語的特徴を有する要素が存在することを指摘し、それらを NCI (negative concord item, 否定一致表現) と呼んで、NPI とは区別して扱う必要があると論じた。さらに最近、日本語においても、従来 NPI として扱われてきた「不定語モ」などの要素は、NCI として再分析されるべきであるといった主張が Watanabe (2004) などにより行われてきている。

本論文は、日本語および韓国語の詳しい観察と比較・対照を通して、両言語における否定呼応表現の特徴を生成文法理論の観点から明らかにすることを旨としたものである。具体的には、次の4点に焦点を当てて検討を行う。

- ① 日本語の4種類の否定呼応表現「しか」、「不定語モ(誰も)」、「1-助数詞モ(一人も)」、「決して」および、その韓国語の対応形「bakk-e」、「不定語 do (amu-do)」、「1-助数詞 do (han-salam -do)」、「gyeolko」の性質を、NPI/NCI の区別に基づいて明らかにすること
- ② 日韓両語において、否定呼応要素が同一節内で共起した構文の性質、特に多重否定呼応要素の認可方法、解釈、および類型論的特徴を明らかにすること
- ③ 否定呼応要素の一つである「しか」をその類義表現である「以外」、「ほか」と比較し、その異同を明らかにすること
- ④ 「しか」とそれに対応すると考えられてきた韓国語の「bakk-e」の間に見られる相違点を明らかにし、その原因を共時的および通時的な観点から明らかにすること

本論文の構成は、次の通りである。

第1章と第2章では、本論文の目的と構成を述べるとともに、生成文法理論の枠組みでのNPI/NCIに関する主要先行研究について概観する。

第3章から第6章までは、主として日本語の否定呼応表現について、その特徴を詳しく考察する。まず第3章では、日本語における4タイプの否定呼応表現に対するNPI分析の問題点を指摘した上で、Watanabeが論じている「不定語モ」, 「I-助数詞モ」だけではなく、「しか」と「決して」についてもNCIとして分析すべき根拠があることを述べ、いくつかのテストに基づいてその検証を行う。さらに、「しか」に関して、それが出現する統語環境によって異なる振る舞いを示すことを指摘し、環境に応じて2つの異なったタイプに分類されることを主張する。より具体的には、項位置に現れる「しか」はNPIとして、また付加詞位置に現れる「しか」はNCIとして認可されることを論じる。

第4章では、同一節内に2つ以上の否定呼応表現が現れる構文について考察を行う。基本的には、日本語で多重出現が可能な「しか」, 「不定語モ」, 「I-助数詞モ」, 「決して」をNPIではなく、NCIと捉え直すことによって、定義上、それらの多重性に対処することはできるが、それだけではすべての否定呼応表現の多重生起可能性とそこに見られる解釈の違いを説明することはできない。ここでは、前章で論じたように、付加詞位置に現れる場合と項位置に現れる場合を区別し、付加詞位置のもののみをNCIと考えるとによって、多重出現の環境とその解釈の曖昧性が説明できることを論じる。

第5章では、引き続き否定呼応表現の多重生起の問題を取り上げ、特に「しか」と「不定語モ」の共起可能性に焦点を当てて考察を行う。これまでの研究では「しか」と「不定語モ」が共起した場合をすべてまとめて扱おうとしてきたが、ここでは両者がまとまって単一構成素を成すタイプと成さないタイプの2つに分類され、統語的に異なった方法によって認可されなければならないことを示す。

第6章では、「しか」をその類義表現である「以外/ほか」と比較し、その相違点を明らかにする。これまで、否定辞と共起する「以外/ほか」はいわゆる「其他否定」として「しか」と同列に扱われてきた。本論文では、まず両者が他のNCIとの共起現象、反語表現構文、不特定読みをもつ数量詞構文などにおいて異なる振る舞いを見せることを指摘した後、その違いを捉えるためには、「しか」が否定辞に直接認可されるのに対して、「以外/ほか」を認可するのは否定辞自体ではなく、非顕在的なNCI「不定語モ」であることを論じる。

第7章および第8章では、日本語の否定呼応表現の分析をもとに韓国語の対応形を考察する。第7章では、韓国語の「bakk-e」, 「不定語 do」, 「I-助数詞 do」, 「gyeolko」は、対応する日本語の「しか」, 「不定語モ」, 「I-助数詞モ」, 「決して」同様、NPIではなくNCIとして分析されるべきであることを、日本語と同様のテストを用いながら示す。また第8章では、韓国語における多重否定呼応表現について、第5章で見た日本語の場合と基本的に同様の分析が適応できることを示す。

第9章では、日韓両語の共通性を中心に議論を展開した前2章とは逆に「しか」と「bakk-e」が見せる相違点をいくつか指摘し、そうした違いがなぜ起こるのか、共時的のみならず通時的な観点からも考察を加える。具体的には、「bakk-e」が「しか」よりも広い機能を有し、「しか」に加えて「以外/ほか」に当たる用法をもカバーしていることを示す。さらに、両言語の違いは「しか」と「bakk-e」の文法化の程度の差と「ほか」や「oe-e」などの類義表現による阻止現象といった観点から説明が与えられる可能性があることを示唆する。

第10章では、本論文のまとめと今後の課題を述べる。

## 審査の結果の要旨

本論文は、日本語と韓国語の否定呼応（一致）現象に関する生成文法の立場からの包括的な研究である。否定呼応現象については、Klima（1964）以来、様々な言語からのデータに基づいて数多くの研究が行われ

てきており、現在でも特に比較統語論の観点から活発な議論が展開されている。本論文は、そうした先行研究の流れを十分に踏まえた上で、日本語と韓国語の事実を丁寧に観察しながら、両言語の当該現象に見られる特徴を体系的に描き出している。

本論文は、分析範囲を典型的な要素のみに限定して、その他の関連要素の扱いには目をつむるといった恣意的な問題設定を行うのではなく、日本語における「しか」、「不定語モ」、「1-助数詞モ」、「決して」という4種類すべての否定呼応表現とその韓国語の対応形を扱っている点で、記述的に非常に広い射程をもった研究である。さらに、本論文では、項と付加詞という統語位置による否定呼応表現の振る舞いの違い、否定呼応表現の多重生起環境、「しか」と「bakk-e」というこれまで同じように扱われてきた要素間の統語的および意味的相違など、先行研究ではまったく気づかれていなかった新しい事実観察が数多く提供されており、当該現象の研究に対する本論文の記述的なレベルでの貢献だけをとってみても、十分に価値の高い研究であると考えられる。

しかも、著者は、そうした広範囲な現象を扱った研究にありがちな単なる事実の羅列や個別言語内での一般化の列挙に終わらせず、人間言語の普遍性と個別性を体系的に捉えようとする生成比較統語論の主導概念に則って、それぞれの否定呼応要素間の異同、および言語間の異同を首尾一貫した形で捉えることの出来る分析を提示しており、理論的な観点からも非常に高く評価できるものである。

他方、本論文は、上述のように記述的にも理論的にも意欲的な研究であるが故に、未解決のまま残された問題も少なからず存在する。例えば、著者は、否定呼応表現が項位置に出現する場合と付加詞位置に出現する場合で、それぞれNPI/NCIと特性が異なると主張するが、それはいったいなぜなのか、また同一の形式でなぜそうした違いが起きるのかといった問題が起こってくる。それは、さらにそもそも自然言語にはなぜNPIとNCIという2つのタイプの否定呼応表現が存在し、それらの間の関係はどうなっているのかという根本的な問題へとつながっていく。しかしながら、こうした問題は、むしろ、本論文が産み出した成果をもって初めて具体的な形で問うことのできる発展的な問題であり、決して本論文の価値を減ずるものではない。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。